

概観

二十一世紀の野沢北高校をもっともよく知る甘利義夫（六六回卒）は、理数科発足当初を次のように語る。

「一九九四年、理数科最初の学年が入学した。私は普通科の担任として同じ学年に入った。理数科は元気がいいクラスだった。クラスの核になるような優秀な人間がいた。クラスのみんなは引っぱられていった。理数科の担任は楽だった。すべて生徒がやってくれた。」

そして、普通科の中にも、理数科と張り合っただ頑張るという生徒がいくらでもいた。そういった意味でも、理数科をつくったことはよかった。学習成績や進学に十分成果があった。ちなみに、自分たちの学年は、卒業の時に、国公立大学現役合格者が百十六人に達した。」

甘利は、二〇二一年現在、非常勤講師として再び野沢北で化学を指導している。十数年前と現在の生徒を比較して、次のように語る。

「前回も今回も一貫していえることは、生徒たちが、いい話はしっかり聞くといいこと、言動をどうすべきかわきまえているということ、思いやりのある生徒が多いということだ。今は生徒の数が少ないので、集会は静かであり、全体におとなしい。学校は生徒の人数が多いほうが活気があっていい。」

自分が非常に残念に思っていることは、『選手慰安の歌』が歌われなくなってしまったことだ。これを何とかして復活させたい。」

甘利が端的に語ったのは、ほぼ二十一世紀二十年間の野沢北の姿である。この二十年間に、実に多くの変化があり、特筆すべきことが多い。本書では、百年史に続くものとして、主に、二〇〇一（平成一三）年以降の野沢北の歴史を述べたいと思う。

一九九四年に理数科が新設された。これにより、二十一世紀に入ってからの前半は、理数科を軸として進学が大きく伸びた。一九九五年に佐久長聖高校に中高一貫クラスが設置されたことも、いちじるしく刺激になった。

両校が競いあって、東信地区の進学を引っばったといえよう。二〇〇二年学校週五日制完全実施、二〇〇四年十通学区制から四通学区制への移行、二〇〇四年理数科二〇〇五年普通科前期選抜実施、二〇〇二年の土曜補習授業・土曜開放講座から二〇〇七年の土曜公開授業への展開、二〇一〇年の岳南会中高一貫教育研究委員会の発足、学校自己評価・教員評価・学校評議員制度・保護者評価などの導入と進展、二〇一七年普通科への探究学習導入・二〇一九年県教育委員会によるスーパー探究校指定と、校内・校外の変革が相次いで行われた。

これらのうち、二〇〇四年の四通学区制の実施は、学力面で本校にきわめて大きな影響を与え、学力トップ層の地区外流出傾向をもたらした。小諸・御代田・軽井沢・佐久市北部の生徒の上田高校への流出、また、川上・南牧の生徒の北杜市立甲陵高校への流出が起こった。屋代高校と諏訪清陵高校における中高一貫校の開設も、少なからざる影響を及ぼしている。

そして、全国的な高齢化・少子化の進展の中で、本校も再編統合の大波に無縁でいられなくなった。二〇二〇年九月、県教委より野沢北と野沢南を統合する高校再編整備計画案が発表された。両校および両校同窓会、地域社会は、これを前向きに受け止め、再編統合と新校発足に向けて、各レベルで活発な検討が行われている。統合に向けて中心的な役割を担っているのは、県教委が設置した懇話会（佐久新校再編実施計画懇話会）である。両校内部で再編統合のためのプロジェクトチームが活動をスタートさせた。また、両校同窓会も、それぞれの協議を踏まえながら、しばしば意見交換の機会を設けている。両校および両校同窓会の活発な議論の成果は、懇話会に意見として反映され、新しい学校づくりの基軸となっていく見込みである。地域社会の皆さんは、両校の統合に非

常に強い関心を寄せている。特に、子どもを持つ親は、佐久地域から公立の進学校が無くなってしまおうのではないかと、心配をしているようである。二〇二一年二月、佐久市民新聞における、吉岡徹野沢北同窓会長と中島瑞枝野沢南同窓会長の対談は、大きな波紋を呼び、心配する保護者に安心感を与えるものであった。それは、「両校を足して二で割った学校をつくるのではなく、新しい進学拠点校をつくる」というものであった。いずれにしても、数年後の新校発足に向けて、協議が進められているところである。